

大垣真宗学院 同窓会

同窓会報 創刊号

発行日 2008年12月10日
事務局 岐阜県大垣市伝馬町11
大垣教務所内
電話 0584-78-3363
FAX 0584-78-3353
郵便局振替口座番号 0830-7-206305



大垣真宗学院同窓会発足にあたって



同窓会長 佐藤 義成

(一九七一年卒 長浜)

今夏、みなさまのご賛同を得まして大垣真宗学院の同窓会が発足いたしました。二〇〇七年に学院を卒業された長浜教区のある坊守さんが、学ぶ楽しさと大切さを教えられた学院との縁が卒業と同時に切れてしまうことを残念に思われ、同窓会結成を願われたことが発端でした。

今年四月七日に大垣教務所で初の発起人会を開催し、規約、会計、発会式までの準備など、次第に具体化し、八月二日の同窓会発会式の案内状を五月十日に発送しました。

同窓会当日は、大垣、岐阜、長浜、高山はもとより、北海道、福井、三重、京都など遠方からも、あわせて約七十名のご参加があり、規約、役員が全会一致で承認され、大垣真宗学院同窓会が正式に発足しました。炎天下の別院正面で記念撮影の後、懇親会場に移動し、懐かしい先生方のスピーチ、旧友との再会など同窓会ならではのひとときを過ごしました。

最後になりましたが、発足にあたりご支援を頂きました多くの方々に衷心よりお礼申し上げますとともに、学院ならびに同窓会に今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

合 掌

大垣真宗学院同窓会

発会にあたっての祝辞



学院長 澁谷 昌

このたび、大垣真宗学院の同窓会が、多くの同窓生のもと盛大に発会されましたこと、誠にご同慶にたえない次第であります。

これまでに大垣真宗学院で学ばれた諸氏は、約七百名に及んでおり、それらの方々にご案内をされ、志を同じくした、学友とも更に親交を深め、近況や情報を交換する場を開き、学び合う仲間としてのご縁を大切にされようとする姿勢には大変素晴らしいものがあります。

願わくはこの尊いご縁の場が、皆様方、お一人おひとりの燃えるような熱意によって、いつまでも存続し、これから入学される未来の大垣真宗学院生の大きな灯火となって輝き続けることを切に念じております。

最後になりましたが、同窓会発会までに並々ならぬお力をつくされた発起人各位の熱意とご苦勞、同窓会設立の趣旨に賛同し、ご参加されたみなさまのお心に、深甚の敬意を表します。

同窓会報発刊にあたっての祝辞



教務主任 鷹橋 賢由

「大垣真宗学院同窓会発足について」の案内に述べられていたように、一九五三（昭和二十八）年、「大谷高等学院」が開設され、教室は、旧本堂の、壊れそうな後堂の一角でした。その後、大垣幼稚園の旧園舎に移されました。幼児用の椅子・机に身をかがめて、窮屈な思いをしながら、エアコンもない教室で、汗を流しながらの夏を送りました。

一九七二年、現在の別院本堂が再建され、教室を間借りすることになりました。一九七三年には、「大垣真宗学院」と改称され、新編成をしてスタートしました。一九八一年、教師無試験検定の認定学事機関に承認されました。その間の卒業生、修了生は、約六百四十人に及んだのです。

通称「夏季学校」といわれていた学院も、時代の要請によってそのかたちを変え、今日では、土曜昼間、土曜夜間、夏季集中の3コースが編成され、合計四十九人が在籍していますので、今日、約七百名の卒業生、在院生を数えることになりました。

このたび、思いがけなく、同窓会結成の声が上ががり、発起人の皆さんのご苦勞により、

ついに同窓会が発足しました。

そして、「会報」を発刊し、点として孤軍奮闘していた同窓生が、手をつないで線となり、やがて面を構築することを目指し、闘法する教団形成を願って動き始めました。産声を上げたばかりの「同窓会」が、やがてみんなを支えてくれるような「同窓会」に育ってくださることを念ずるばかりであります。

「大垣真宗学院同窓会報」発刊おめでとうございます！



懇親会に参加くださった恩師の先生方

大垣真宗学院同窓会に参加して



廣澤 仁子
(一九九三年卒 大垣)

今回、なつかしい、北海道の新井さんにお会いできたこと、本当にうれしかったです。学院では、自分が何を勉強しているのかも、わからないようなころでした。

同時に生活上の悩みと実父との別れを体験し、理由もわからず、涙が止まらなかったことを思い出します。そして、十五年たった今、真宗の学びをさせていただいています。

「難中之難無過斯の縁」



森 全太郎
(一九九八年卒 長浜)

このたび、会報投稿の機会を得て大変うれしく存じます。わたしは「在家門徒」でしたが、亡き妻と一緒に通学いたしました。いま思えばよくよく「本願念仏」の教えに出遇はさせられる、深い宿世のおはたらきがあったのでしよう。

「善知識にあうことも おしうることもまたかたし
よくきくこともかたければ 信ずることも

～発会式～



なおかたし」(聖485)

と述べられていること、この「不可思議」

は大垣真宗学院での値遇よりはかありません。先日同級生のK婦人が次のようにお話しくださいました。彼女は重い病気の身の中から

「森さん、お念仏さまの、おはたらきは、『願成就文』一文だったのですね」と、弱々しい体から、生き生きとした声で教えてくださいました。こうしたご縁に触れ、あらためて「自己」を問い返させて戴きました。観鷲聖人もこのわたしに

「真宗のききがき」、性信房のかかせたまいたるは、すこしもこれにもうしてそうろう様にたがわずそうらえば、うれしうそうらう」(聖597)

と、お慶びと激励を下さっています。愈々「唯仏一道」の歩に精進させていただきたく存じます。



朝倉 光寿
(一九九九年卒 福井)

この度、初めて同窓会が開催されるということでも久しぶりに大垣へ足を運びました。会場にて、懐かしい先生方や同窓生にお会いすると、当時のことがよみがえってきました。授業中に一番前の席で眠ってばかりいたことが思い出され、あの時もっと先生のお話をお聞きすれば良かったと反省ばかりしてしまいました。

今回は紹介も兼ねて、妻にも同行してもらいました。妻は幅広い年齢層の方々が出席されているにもかかわらず、その一体感に感嘆した様子でした。

これから
も是非、出席させて
いただきたい
と思います。

～懇親会～





後藤 昭子
(二〇〇五年卒 岐阜)

今、学院生活を振り返ってみれば、当時五十歳の私にとっては、若かった学生のときのような新鮮な生活を思い出していた。働いているときとはまったく違い、楽しくうれしかった。しかし、一方で先生の話が難しく、理解できなくて反発をしたこともあった。今では、それが昨日のことのように、とても懐かしい思い出になっています。

現在は、月一回、近所の方と真宗の勉強会をしています。日頃言えない愚痴を言い合う場所を提供しています。私にとって学院は行くべくして行った道であり、新しい私の出発点であったと確信しています。そして今の私にとって大切なことは、人の真心を素直に受け入れることができるようになったことです。



次回の同窓会のご案内

初めての同窓会は、多くの皆さまのご参加により、大盛況でありました。ありがとうございました。今後は年一回の総会と会報発行を予定しております。次回の同窓会は、二〇〇九年六月二十日(土)午後を予定しております。詳細は追ってご案内いたしますが、橋賢由先生による特別授業もありますので、どうぞ、お誘い合わせてご参加ください。

発会式・懇親会等の会計報告

参加者は発会式五十一名、懇親会五十一名(先生方を除く)でした。終身会費を納めて下さった方も四十一名あり、まことにありがとうございます。また、先生方からは当日、多額のお祝い金を頂戴いたしました。厚く御礼申し上げます。全額を同窓会会計に入れて、会の運営に活用させていただきます。同窓会当日までの収支は下の通りです。

収入	・参加費など	57万1000円
	・お祝い金(先生より)	21万円
	・終身会費	41万円
収入計		119万1000円
支出	・会場費(発会式・懇親会)	37万8550円
	・記念品代ほか	14万8940円
支出計		52万7490円
差引残高	・同窓会会計へ	66万3510円

同窓会役員の紹介

	(会長)	佐藤 義成 二九七二年卒 徳島
	(副会長)	高垣 康平 二八九九年卒 徳島
	(副会長)	小笠原まや 二〇〇五年卒 徳島
	(広 報)	三山 京子 二九七二年卒 徳島
	(広 報)	林 文照 二九〇九年卒 徳島
	(広 報)	沼田 和枝 二九九年卒 徳島
	(広 報)	海北 賢子 二〇〇五年卒 徳島
	(広 報)	横井 園恵 二〇〇五年卒 徳島
	(会 計)	児玉 俊雄 二九九年卒 徳島
	(会 計)	杉原 光子 二〇〇八年卒 徳島

編集 後記

時の流れが、年々速く感じられる。同窓会発会式の時は、とても暑くて別院会場に冷房がほしいと思っただのに、今はもう寒くて、こたつが必要。時の流れをいつから、速いと感じるようになったらうか。子どもの頃は、早く大人になりたい。早く一年が終わらないかなーと思ったのに、今は時が、止まってほしいと願う。人間なんて、勝手な生き物。しかし、今私は毎日ナムアマダブツ、ナムアマダブツと生きている。又、明日もよいなことを考えながら生きるのでしょう。(小笠原)